

天理大学広報

発行 天理大学
編集 広報委員会
(学天理大学広報部)
632-8510 天理市袖之内町1050
TEL 0743-63-8420
http://www.tenri-u.ac.jp/

世界を駆けた夏!

- ドイツ、インドネシア、フィリピン -



9月5日～7日まで、学术交流協定校のドイツ・マールブルク大学にて、同大学との共同研究プロジェクトとして、国際シンポジウムを共同開催した。写真はバベッテ・ジーモン副学長と握手する本学の橋本武人学長。(2面に特集記事)

国際シンポジウム
「相互行為としての祈り」を開催
マールブルク大学で

教育改革推進委員会を設置

「建学の精神」の具現化を目指す中長期計画検討のため、安野嘉彦理事長の諮問機関「十年ひとふし委員会」が答申したことは既報(本紙194号)の通りであるが、この「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

「ひとふし」が、要請事項は、その答申書の具体化に向けて、理事長より、学長直屬の委員会を設置し、早急に取組んでほしい旨の要請(その

2006 オープンキャンパス
参加者過去最高を記録
本年度のオープンキャンパスは、7月16日、8月27日、9月17日の3回にわたって開催され、のべ14500人の参加者があった。

今年、体育学部については、9月のスポーツシーズンを避け、単独で8月に体育学部キャンパスで開催した。当日は体育学部志望という明確な目標を持った参加者が多く、熱心に説明を聞き、また実技体験にも真剣に取り組む様子に、本学への思いが伝わってきた。

また、国際文化学部は初めての試みとして、アジア学科の5言語コースの紹介と、ヨーロッパ・アメリカ学科の6言語コースの紹介をそれぞれワンフロアで行った。教室の壁に沿って設けられたブースには、各国の特徴を生かしたディスプレイが施され、それぞれの国の映像や音楽が流された。参加者は目を輝かせながら、それぞれのブースで教員や学生からの紹介を熱心に聞いて回っていた。

11月4日の大学祭時には、学祭を楽しんでもらいたい。

つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を

つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を

つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を、つづ、入試部が個別相談会を



本学ニアス島復興支援委員会などはインドネシアで、また、地域文化研究センターはフィリピンで、復興支援活動などを実施した。写真は新しい校舎・机・イスを喜ぶ、モアウオ小学校の児童。

復興支援活動に汗と涙
インドネシア、フィリピンで

陸上競技場を全面改修 体育学部キャンパス

9月15日、体育学部キャンパスにおいて、20年ぶりに全面改修された陸上競技場の竣工式が、安野理事長、橋本学長をはじめ多数の教職員が出席して行われた。

今回の改修で特筆すべき点は、トラック表面のウレタン舗装。国内でも著名な陸上競技場では採用されている「ウオタートップ」と呼ばれるトップコート材(塗料)を採用。従来のものより格段に遮熱効果が高く、暑い時期でもより快適に競技できることになった。

陸上競技トラック以外にも、走り幅跳び、三段跳びピットを改修。さらにはアスリートがウォームアップ、クールダウンを行える足腰に優しい鮮やかな緑の人工芝を敷設。より快適に練習に取り組みできるように配慮した。

竣工式の後、陸上競技部の学生たちが鮮やかなオレンジ色に生まれ変わったトラックを試走する様子。



鮮やかなオレンジ色に生まれ変わったトラックを試走する陸上競技部の学生たち

海外からの来訪者
7月10日、プエブラ栄誉州立自治大学(メキシコ)のエンリケ・アグエラ・イバニエス学長一行9人が、7月26日、台湾大学の梅家玲台湾文学研究所教授ら一行8人が、8月21日、トリパン大学(ネパール)のマンガル・ジャーキヤンバスターフが、9月12日、台湾大学の柯慶明台湾文学研究所長一行4人が、



多数の来場者でにぎわう受付

進むIT化・マルチメディア化

PC自習室 リニューアル

4号棟PC自習室がリニューアルされ、9月8日にオープンセレモニーが行われた。平成14年・15年に導入されたPC100台を総入れ替えし、性能が向上。さらに、PC演習室で行われた授業課題をPC自習室でも行えるよう、演習室同様、

各言語の辞書ソフトをPCに導入した(一部)。加えて、プリント管理システムを導入。これは、消耗品に関するランニングコストを削減するだけでなく、学生の省資源に対する意識高揚も狙いとしている。これにより、4号棟PC自習室だけでなく、体育学部キャンパスのPC自習室・図書室のプリント枚数も一括して管理することが可能となった。

マルチメディア教室
体育学部キャンパスは、従来の64B・64C教室の2教室に加えて7号棟の4教室を新たにマルチメディア対応とし、9月15日にオープンセレモニーが行われた。

マルチメディア教室
これと併せて、体育学部キャンパス30教室、体育学部キャンパス6教室、あわせて36教室がマルチメディア対応となった。従来の印刷資料や黒板による授業だけでなく、インターネット、パワーポイント、DVDなどの動画など、様々な媒体を用いたインタラクティブな教育を行える環境が充実し、さらなる教育効果の向上が期待される。

天理大学・マールブルク大学 国際シンポジウム

「祈り」をテーマに共同開催

去る9月5日から7日までの3日間、天理大学の学術交流協定校であるドイツのマールブルク大学において、国際シンポジウム「相互行為としての祈り」(Prayer as Interaction)が開催された。この国際シンポジウムは、天理大学とマールブルク大学の共同研究プロジェクトとして、また、天理大学の教祖百二十年祭記念行事として開催された。

現代の宗教学の視点から

「祈り」を再検討

このシンポジウムの企画は、このシンポジウムの目的は、マールブルク大学の宗教学者、フリードリヒ・ハイラー(Friedrich Heiler, 1892-1967)が、宗教学の古典的名著『祈り』(Das Gebet, 1918)の中で提示した「祈り」の概念を、現代の宗教学の視点から再検討することであった。

このシンポジウムの企画は、このシンポジウムの目的は、マールブルク大学の宗教学者、フリードリヒ・ハイラー(Friedrich Heiler, 1892-1967)が、宗教学の古典的名著『祈り』(Das Gebet, 1918)の中で提示した「祈り」の概念を、現代の宗教学の視点から再検討することであった。



開会の挨拶をする橋本武人学長

このシンポジウムの目的は、マールブルク大学の宗教学者、フリードリヒ・ハイラー(Friedrich Heiler, 1892-1967)が、宗教学の古典的名著『祈り』(Das Gebet, 1918)の中で提示した「祈り」の概念を、現代の宗教学の視点から再検討することであった。

シンポジウムと

おもな討議テーマ

今回のシンポジウムには、天理大学から橋本学長のほか、宗教学科研究室の教員など10名の宗教学者が参加し、一方、マールブルク大学からは、世界的に有名な宗教学者のマイケル・バイ教授やクラウス・ヒルト博士など、10名の宗教学者が出席した。

今回のシンポジウムには、天理大学から橋本学長のほか、宗教学科研究室の教員など10名の宗教学者が参加し、一方、マールブルク大学からは、世界的に有名な宗教学者のマイケル・バイ教授やクラウス・ヒルト博士など、10名の宗教学者が出席した。

マールブルク大学との交流

3日にマールブルクに到着した天理大学の一行は、翌4日、共同研究プロジェクトの共同開催に先立って、マールブルク大学のバベツェ・ジーン副学長を表敬訪問した。橋本学長は、このたび、プロジェクトのマールブルク大学と交流を持つことができる

の概念とその意味が批判的に再検討された。3つの基調講演の後、9つの個別テーマに沿って、掘り下げた討議が行われた。具体的には、天理教をはじめ、キリスト教、イスラム、仏教などの世界の宗教における「祈り」の諸現象や、現代社会における宗教性と「祈り」の関わりなど、「祈り」のテーマが様々な角度から取り上げられ、現代世界における「祈り」の意味と構造に関する討議が展開された。



マールブルク大学の神学部校舎

催された折、天理を訪問したことがあった。また、本学の創設者である中山正善二代真柱様は、昭和35(1960)年、天理大学で開かれた第10回国際宗教学史学会というテーマで研究発表を行った。また、その折、同博士と親交を深められた。さらに1975年には、マールブルク大学の中央図書館で、「天理教展覧会 人間の陽気ぐらしのために」が開催されるなど、友好的な関係が築かれていった。

シンポジウムを振り返って

このシンポジウムに基調講演者として参加したバイ教授は、「祈りに関する優れた研究発表ばかりだった。両大学が学問的なレベルで理解し合えたこと、そして、素晴らしい出会いがあったことが何より素晴らしい」と述べた。



古い町並みを残すマールブルクの風景

【シンポジウムのプログラム】

開会の挨拶 橋本武人(天理大学長)

第1セッション「一般的なアプローチ」(9月5日)

基調講演「現代の宗教学における祈りの研究」

マイケル・バイ(マールブルク大学)

(1) 討議テーマ「祈り その概念と地平」

ゲルハート・M・マーティン(マールブルク大学)

・澤井義次(天理大学)

(2) 討議テーマ「祈りとその場」

・ハンス・コルゲン・グレシャト

(マールブルク大学)

・深谷太清(天理大学)

(3) 討議テーマ「祈りとその類型」

・ディートリッヒ・コルシ(マールブルク大学)

・東馬場郁生(天理大学)

第2セッション「具体的なアプローチ」(9月6日)

基調講演「祈り その意味と構造」

橋本武人(天理大学)

(4) 討議テーマ「諸宗教における祈りと言葉」

・岡田正彦(天理大学)

・ディークヒルト・フォン・ブルメンタル

(マールブルク大学)

(5) 討議テーマ「宗教経験としての祈り」

・島田勝巳(天理大学)

・ダーク・ケスラー(マールブルク大学)

(6) 討議テーマ「祈りとその心理」

・山中修吾(天理大学)

・ウルリケ・ヴァグナー

(マールブルク大学)

特別セッション「パフォーマンスとしての祈り」

ゲルハート・M・マーティン(マールブルク大学)

第3セッション「儀礼としての祈り」(9月7日)

基調講演「儀礼としての祈り」

マルティン・クラウス(マールブルク大学)

(7) 討議テーマ「祈りと聖典」

・クリストフ・エルザス(マールブルク大学)

・堀内みどり(天理大学)

(8) 討議テーマ「祈りと行為」

・ウルリッヒ・ヴァグナー(マールブルク大学)

・森下三郎(天理大学)

(9) 討議テーマ「相互行為としての祈り」

・澤井義則(天理大学)

全体討議

(司会 ゲルハート・M・マーティン、澤井義次)

閉会の辞 橋本武人(天理大学長)



シンポジウムの様子: 研究発表、ディスカッションすべてが英語で進められた

このシンポジウムに基調講演者として参加したバイ教授は、「祈りに関する優れた研究発表ばかりだった。両大学が学問的なレベルで理解し合えたこと、そして、素晴らしい出会いがあったことが何より素晴らしい」と述べた。

このシンポジウムは、天理大学から高い評価を受けた。天理大学の宗教学のレベルをアピールできたし、大きな力をいげられたと思う」と、シンポジウムの成果を語った。

このシンポジウムの成果を語った。このたび、共同研究プロジェクトとしての国際シンポジウムが成功したことは、これまで天理大学とマールブルク大学のあいだに築かれてきた友好関係のうえに、さらに新たな学術交流の道を拓いたと言えるだろう。

忘れられた被災地へ真心を インドネシアのニアス島で復興支援活動

8月20日～9月1日にかけて、ニアス島復興支援委員会と地域文化研究センター「国際参加プロジェクト」の合同チームが、インドネシアのメダン市、ニアス島、アチエ州を訪れた。ニアス島のモアウオ小学校で校舎、アチエ州の2大学で図書贈呈式を行うとともに、学生は、現地の大学生や小学生と交流をするなど、地震と津波の被災地で、復興支援活動を展開した。これに、広報部職員が取材のため同行し、活動の実際をドキュメンタリー風に報告する。

結団式で心の準備

インドネシア第4の都市 メダンへ

インドネシアを訪れたのは、大橋正副委員長、ニアス島復興支援委員会(以下、支援委員会)と地域文化研究センター(以下、地文研)「国際参加プロジェクト」の合同チーム(教職員・学生)・谷口忠三国際交流部長、ふるさと会を代表し卒業生の菊山孝昭さんら約30人である。出発前の8月19日に地文研共同研究室で結団式を行った。挨拶した橋本武人学長は、言葉が通じない中、現地の人と共に復興に汗を流すのは、国際的なスケールの他者への献身と、これを通じて、宗教性と

20日、関西国際空港からシロインガポール航空機で一路インドネシアへ。インドネシア共和国は東南アジアの南部に位置し、ジャワ島など1万7500の島々からなる世界最大の島嶼国家。人口は約2億4500万人。国民の87%がイスラム教徒という国である。その中のスマトラ島が最初の活動地。同日夜、本学一行は、北スマトラ州の州都メダンに降り立った。メダンには約250万人、同島最大の都市メダンに降り立った。メダンでの協力者、ハディジャ・ウメダさん(ハディジャ・ウメダさん)と向かった。ハディジャさんは本学の別科卒業生で、現在はメダン日本総領事館現地スタッフ。流暢な日本語であった。

ご協力ありがとうございました

私ども委員会の活動に対し、街頭募金に協力いただいた方々、天理教海外部国際たすけあいネットなど団体の方々、および本学の卒業生、学生、教職員から、合計 10,170,694 円の寄付を頂戴しました。募金の内訳と用途は下記に掲載しております。今後、タイの津波被災地とニアスへの継続的支援を予定し、プラン検討中ですが、有効に使わせていただきます。皆様の善意とご協力に改めて心よりお礼申し上げます。

天理大学ニアス島等復興支援委員会

メダンの活動地

ニアスへ

24日、ムルバティ航空の30人乗り小型プロペラ機でメダンを発ち、振動とエンジン音に包まれながら約1時間後、ニアス島のヒナカ空港に着く。木々は高々と太陽に向かって聳立ち、まさに南洋の島。また、自動車が少ない。現地協力者のヨビ・マナルさんが手配した車(救急車含む)3台に全ての荷物と総勢28人が分乗するハードなスタートとなった。

ニアス県教育局に寄り着いた。ハディジャさんが依頼した方々は、日本語教師、本学卒業生、天理教の方などで日本語を話せる方が多かつた。不安と期待を抱え、学生たちはホームステイ先へ向かった。

22日、10学部・学生数約2万3000人の北スマトラ大学を訪問。政治社会学部での交流式典の後、本学学生が折り紙を教える、学生同士の姿もあつたが、全員無事ホームステイ先へ向かった。

25日、モアウオ小学校児童と交流開始。日本の小学生が描いた絵と交換するため、持参したクレヨンなどを渡し絵を描いてもらう。インドネシア語の「指差し会話帳」を手につけて、ジェスチャーなども交え懸命に交流。

26日、折り紙を教える。児童だけでなく先生方も熱心であった。また、この日から校庭に花壇を造る。島内を走り回ってレンガ調達、他の工事現場からの砂利とセメントを、資材はすべて現地調達。セメントをこね、レンガを積み、排水路を設けた。

27日、校舎建設最終段階。壁のペンキ塗りや、贈呈する机などへ白ペンキで大学名を入れた。また、木を植えた花壇も完成。そして、この日から大橋副学長一行も合流し、メダンにも参加した。

28日、いよいよ校舎贈呈式典。児童らが日の丸の旗を持ち、民族衣装に身を包んだ女性たちも待つ中、ハディジャ・ウメダさんら一行が入場し、学校関係者など約300人が出席する盛大な式典が



孤児院で、天理小学校児童らの絵を見せる本学学生



完成した校舎の前で、来賓を迎えるモアウオ小児童

建支援には深く感謝している。これはニアスの復興と将来建設の鍵を握るもの。さしおのべられた友情に心より感謝している」と謝意を述べた。

その後の余興では、同校児童の民族舞踊などに続き、学生たちがソーラン節(踊り)を披露。大きな歓声と拍手に包まれた。最後に、本学から児童全員へ天理大学名入り体操服などを贈った。

29日、ニアス最終日。飛行機トラブルで出発時刻が繰り上がり、別れの挨拶もそこそこ空港へ。別れを惜しむ時間ももなく、学生と現地の方々非常に残念な形となった。

30日、学生らはメダンのホテル「アチエ」でお別れ会を催し、帰国の途についた。大橋副学長、山本副委員長らはアチエへ向かった。

津波の爪痕が残るアチエ

アチエは、スマトラ島北端の特別州で、イスラム信仰の強いイスラム教の拠点。現地では、研究目的でアチエ入りしていた菅原由美アジアカリコが、アチエに滞在していた。アチエは、多くの熱意が実を結び、アチエの未来を担う。アチエの未来を担う。アチエの未来を担う。

アチエは、スマトラ島北端の特別州で、イスラム信仰の強いイスラム教の拠点。現地では、研究目的でアチエ入りしていた菅原由美アジアカリコが、アチエに滞在していた。アチエは、多くの熱意が実を結び、アチエの未来を担う。アチエの未来を担う。

募金とその用途(予定)

8月31日現在 総額	10,170,694 円
＜内訳＞	
教職員	1,715,500 円
卒業生	967,200 円
街頭募金	1,400,763 円
天理教海外部	
国際たすけあいネット	5,000,000 円
一般	1,087,200 円
利子	31 円

- 用途 実施済み分と予定
- 5,500,000 円
ニアスでの小学校校舎再建
 - 3,000,000 円
アチエの2大学へ図書など寄贈
 - 1,000,000 円
タイへの継続的支援活動
 - 600,000 円
ニアスへの継続的支援活動
(3・4はプログラムを立案中)

- モアウオ小学校への贈呈品一覧
- 校舎1棟(3教室)
 - 黒板、机、イス、教壇
 - 天理大学名入り体操服(児童全員)
 - 学生手作りの絵本1冊(日本語、インドネシア語併記)
 - 日本の小学生の絵画(クレヨン、画用紙も贈呈)
 - 絵手紙(インドネシアとタイ語コース学生作)

ニアス島等復興支援委員会

- 2004(平成16)年
12月26日 スマトラ島沖地震によるインド洋津波発生
- 2005(平成17)年
1月 本学のインドネシアとタイ語コースの学生らが、25・26日に天理駅前街頭募金。
3月28日 スマトラ島沖で地震発生。
8月 ニアス島ならびにアチエ州を視察し、支援の可能性を探る。ニアスでは小学校校舎再建、アチエではシア・クララ大学などの図書について支援要請があった。
10月6日 国際文化化学部長を委員長に、教職員・学生有志による「天理大学ニアス島復興支援委員会」(以下、支援委員会)が発足し、支援計画を立案。
支援委員会は、学長ら計50人の呼びかけ人名で、500万円を目標に募金開始。
天理大学ふるさと会(同窓会)の協力で、インドネシアとタイ科卒業生に寄付を依頼。
学生が中心となり天理駅前などの街頭募金を実施。2005(平成17)年10月25・26日、11月25・26日、12月18日、2006(平成18)年1月25日、4月18日、24日、5月29日の計9回。
10月11日 支援委員会、設計図作成と建設業者選定。
12月 地域文化研究センター(以下、地文研)スタッフが、メダンとラサを視察し、同地でのプロジェクト実施を決定。
- 2006(平成18)年
3月後半 支援委員会と地文研のスタッフがメダンとニアスを再訪。支援対象校舎最終決定。本学学生と同校児童および地域社会との交流計画なども合意。
5月23日 支援委員会、ニアス県教育局との合意書や建設会社との契約書を承認し、2/5月末に校舎建設着工。
6月27日 支援委員会が寄付金使途概略を決定(別掲)。
7月20・28日 支援委員会と地文研のスタッフが、建設工事の進捗確認、贈呈式の準備、「国際参加プロジェクト」の最終準備のため、メダンとニアスを訪問。
8月19日 本学にて結団式を行う。
8月20日 支援委員会と地文研「国際参加プロジェクト」合同チーム、日本を出発。
8月21日 メダンの孤児院を訪問し交流。
8月21日 今回の活動が評価され、在メダン日本国総領事主催昼食会に招かれる。
学生たちは、メダンでホームステイを開始。
8月22日 北スマトラ大学を訪問し同大学生と交流。
8月23日 インドネシア最大のオーバルコート工場見学。
8月24日 ニアスへ移動。モアウオ小学校を訪問後、学生はホームステイ開始。
8月24日・27日 モアウオ小学校を訪問し、児童らと交流。また、贈呈する校舎の仕上げに開け、花壇造りなども行う。
8月28日 モアウオ小学校にて、校舎など贈呈式典。
8月29日 ニアスを発ち、メダンへ移動。
8月30日 メダンのホテル「アチエ」でお別れ会。学生らは帰途につく(31日帰国)。
大橋正副学長一行は、アチエに移動し、シア・クララ大学とアル・ラニール国立イスラム高等学院を訪問し、図書目録などの贈呈式を行う(9月1日帰国)。

インドネシア活動秘話

忘れられた被災地

地震と津波で、ニアスとアチエは大きな被害を受け、インドネシアでは2005(平成17)年4月にアチエ・ニアス復興マスタープランが決定。アチエ・ニアス復興再建も設置された。しかし、復興進捗は遅く、特にニアス島は、国際的にもインドネシアの国内的にも「忘れられた被災地」という状況であった。



津波で打ち上げられた発電船。津波で打ち上げられた発電船。津波で打ち上げられた発電船。津波で打ち上げられた発電船。

多くの真心を

小学校舎贈呈にあたり、支援委員会では、現地に一任せず、設計段階から耐震強度を考慮し、また、現地協力者に工事進捗管理をしてもらうなど、多くの人の真心を遺漏なく現地に届けることを目指し、実現した。これには、現地委員会の功績が大きかった。

天理教海外部からも

今回の活動は、多くの方の真心で実現したが、一般の方々のご芳志は、インドネシア語・タイ語コースの学生らが街頭募金をした結果、この取り組みが大きかった。

現地新聞報道も

『じゃかるた新聞』(現地刊の日本語紙)8月11日号で贈呈した校舎が同国の基準を上回る耐震強度を持つことなどを含め、今回の活動が紹介された。

合言葉は「ヤホウ」

ニアス島ヒナカ空港歓迎ゲートに「ヤホウ」という文字が大きく掲げられている。

山の幸、海の幸

インドネシア料理には基本的にご飯がついており、日本人なら安心。ただし、大人向けは平均的に辛く、苦手な人には大変。海の幸・山の幸はふんだんにあり、南国の自然の恵みが満ち溢れている。魚の種類は豊富で、カエルや水牛も美味。また、果物は王様と言われるドラリアンをはじめ、シルサクなど校舎にいとまがない。

「来年に向けて」

佐藤 富子 (ドイツ語コース2)

日本と異なる環境・文化の中で、いろいろな考えや行動が、ホームステイ先では、娘さんが偶然ドイツ語を勉強して、いて運命的なものを感ずいた。小学校で、私たちに興味を持ち集まってくる子どもたちに圧倒され、ホームステイ先の子どもにも「日本語を教える」と質問責めにあった。今年おおよび自分の課題も見えてきた。来年は、「ゴミをゴミ箱に捨てる習慣」を子どもたちに学んでもらいたいと思う。現在は、「ゴミを捨てる」置きっぱなしという状況なので、インドネシアのゴミ事情を調べ、対策を考え、来年の活動の手助けをしたい。

「第二の故郷」

水谷 正幸 (英米語コース4)

今回の活動は、学校での交流(文化スポーツ)に、いかに街を兼ねたフィールドワーク、街の清掃などであった。2度目の参加で、前回お世話になった子どもたちとの再会もとても感動した。それは、自分でも感動した。それは、自分でも感動した。それは、自分でも感動した。

「千羽鶴に願いを込めて」

半田 美津子 (英米語コース4)

前回参加した友人から、多くの感動を得たと聞き、今回も自分でも感動した。それは、自分でも感動した。それは、自分でも感動した。

「高大連携で二部生も」

椋野 和子 (天理高校第二部職員)

今回の社会人枠は社会に開かれた大学の証だと考える。参加決定後、私は看護師と



ふたたび「ザンタローサ」へ

フィリピン共和国でボランティア活動

8月14日、20日まで、本学地域文化研究センター(以下、地文研)は、フィリピン・プロジェクト06を実施。「社会連携」を志向し、社会人2人が参加。学生9人、引率者2人の総勢13人がフィリピン共和国で、ホームステイをしながらボランティアや文化交流活動に汗を流した。

フィリピンは、人口約8624万人、太平洋に浮かぶ7107の島々からなる国で、過去の歴史から、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの生活様式と文化が一堂に会し、イストラ

地は前回と同じフィリピン最大の島・ルソン島にあるサンタローサ市。前回は日本全国から集めた、家に眠っているリーダーを贈り、その指導などを行ったが、今回は小学校・高校での文化交流・スポーツ交流、ボランティア活動および、いかに「おたすけ」を行い、参加者が国際協力の在り方を考え、今後どのような活動に取り組めるか考えてもらう狙いで行われた。今回参加した社会人は、天

フィリピン・プロジェクト活動記録

- 8月14日
 - ・日本出発。香港経由でフィリピンのマニラに到着。
 - ・サンタローサ市到着後、各自ホストファミリー宅へ。
- 8月15日
 - ・サンタローサ市庁舎訪問。
 - ・サンタローサ市立工科高校、市立小学校で打ち合わせ。
- 8月16日
 - ・サンタローサ市立工科高校でスポーツ交流。
- 8月17日
 - ・サンタローサ市立小学校で文化交流。
- 8月18日
 - ・ホストファミリーを招き「さよならパーティー」開催。
 - ・マニラに移動。
 - ・マザー・テレサのミッション施設「Home of Joy」で障害児に食事介助。
 - ・8月20日
 - ・帰途につく。

参加者の声

「笑顔」

福西 穂高 (中国語コース3)

インドネシアでは笑顔に助けられ、改めてそのことだ。散歩していても全く素晴らしいと感じさせられた。インドネシアの子どもは目がクリッと現すと、日本の昭和30年代頃のような感じだ。乗った瞬間に「おはよう」という感じがした。

「プロジェクトを終えて」

内野 準子 (英米語コース4)

「このプロジェクトに参加して本当によかった」というのが率直な感想。出発前は不安だったが、行ってみると毎日が楽しくてアツという間に過ぎ、インドネシアの人たちの温かさに触れた。充実した12日間であった。

「来年に向けて」

佐藤 富子 (ドイツ語コース2)

日本と異なる環境・文化の中で、いろいろな考えや行動が、ホームステイ先では、娘さんが偶然ドイツ語を勉強して、いて運命的なものを感ずいた。小学校で、私たちに興味を持ち集まってくる子どもたちに圧倒され、ホームステイ先の子どもにも「日本語を教える」と質問責めにあった。今年おおよび自分の課題も見えてきた。来年は、「ゴミをゴミ箱に捨てる習慣」を子どもたちに学んでもらいたいと思う。現在は、「ゴミを捨てる」置きっぱなしという状況なので、インドネシアのゴミ事情を調べ、対策を考え、来年の活動の手助けをしたい。

「第二の故郷」

水谷 正幸 (英米語コース4)

今回の活動は、学校での交流(文化スポーツ)に、いかに街を兼ねたフィールドワーク、街の清掃などであった。2度目の参加で、前回お世話になった子どもたちとの再会もとても感動した。それは、自分でも感動した。それは、自分でも感動した。

「千羽鶴に願いを込めて」

半田 美津子 (英米語コース4)

前回参加した友人から、多くの感動を得たと聞き、今回も自分でも感動した。それは、自分でも感動した。それは、自分でも感動した。

「高大連携で二部生も」

椋野 和子 (天理高校第二部職員)

今回の社会人枠は社会に開かれた大学の証だと考える。参加決定後、私は看護師と

支援活動の今後の予定

支援委員会は、「天理大学の国際参加・協力を考えるシンポジウム」(仮題)の開催や、11月27日～30日の間4号棟学生ホールで支援活動の写真パネル展を行う予定。地文研「国際参加プロジェクト」関連では、年度内にインドネシアとフィリピンでの活動報告書をまとめ、全参加者の声など詳細を掲載予定(詳しくは同センターまで)。

また、支援活動としては、「国際参加プロジェクト」は来年度以降数年間メダンとニアスで継続実施を、支援委員会としては、ニアスへの支援を継続し、タイの津波被災地への継続的支援も実施する予定。

活動は、小学校での折り紙指導や街の清掃作業、マザー・テレサ・ミッション施設での障害児への食事介助などを行って、主なものとしては、8月16日に、生徒数400人の公立の4年生工科高校・Science & Technology High Schoolにて三運動会を開催し、玉入れ、大縄跳び、バスケットボールなどを行った。

8月17日には、サンタローサ市の中心にある、児童数約600人の公立小学校・Central Elementary Schoolにて文化交流「千羽鶴の紙芝居」上演し好評を博した。

現地の児童や生徒は、受身でなく積極的に、5教科以外の授業は行われていないが、絵や歌はすくすく上手だった。

8月19日には、マザー・テレサのミッションに基づく貧者救済施設「Home of Joy」を訪問。ここには、孤児や障害を持つ子どもが約40人入所していた。シスターは約20人で、水浴びや離れのトイレなど生活環境も大きく異なっていた。参加者は適応していた。

参加者は最初戸惑ったようだが、遊んだり食事の配膳をする中で入所児と打ち解けていった。

地文研では、今後は「国際参加プロジェクト」として実施することを検討しており、活動のさらなる充実や現地の交流の深まりが期待される。

2階級制覇

全日本学生柔道体重別選手権大会



喜びの表情を見せる齋藤俊君(写真左)と穴井隆将君(同右)

学生体重別日本一を決める全日本学生柔道体重別選手権大会の男子90級および100級決勝が、10月15日、日本武道館で行われ、齋藤俊選手(体育4)が90級で、穴井隆将選手(同4)が100級で見事優勝を飾った。

穴井選手と絶対二人で2階級制覇しようとしていた齋藤選手は、優勝の瞬間ガッツポーズ。昨年のこの大会は8

減量と厳しかったが、今回は3級の減量と楽だった。今後の体が良く動いた。今後、天理の柔道をしつかり学んで、世界に羽ばたきたい」と語った。

また、100級の穴井選手は、体調は好調時と比べると7割程度だったというが、準々決勝以外はすべて一本勝ちと危なげなく優勝。しっかりと勝てた良かった。また、天理の選手が活躍してくれてうれしい。個人の強さはこの大会で証明できたと思うので、団体戦でも是非優勝したいですね」と語った。

なお、100級は2位に沈志昊選手(体育3)、3位に出口雄樹選手(同3)が入賞。女子は、貴田絵梨香選手(同3)が63級で3位と本学選手の活躍が光る大会であった。

第54回全日本学生弓道選手権大会で仲尾瞳さん優勝



(有)スポーツ写真通信社提供

第54回全日本学生弓道選手権大会が8月20日に愛知県体育館にて行われ、女子個人戦(近的)で、本学の仲尾瞳さん(中国語コース3)が見事優勝を果たした。女子個人戦の優勝は本学初の快挙。

試合形式は予選が15分28秒(先的に、一手皆中(ひとてかいちゅう)・二本とも命中させる)で決勝進出者を決め、決勝戦は、はじめの3本は一尺二寸(36センチ)の的に、その後は八寸(24センチ)の的に射つていく。団体戦は、向かって矢を射、はずした時点で負けとなる。

「日頃の練習通り、射型(しやけい)・矢を射るときの一連の動作)と大配(たいはい)を配りました」と語る仲尾さんは、普段から、団体戦になつたときに後輩たちがリラックスできるように、自分が中(あ)てるのの自覚をもって練習に励み、一本一本に集中して練習に励んだ結果、約9割は中てることのできるよう

なつていたという。「仲間の声援や監督のアドバイスが力になりました。仲尾さんは難なく一手皆中で予選通過。決勝射撃では一本もはずさない緊迫した雰囲気の中、的中を称える部員たちの声援が体育館に響き渡る。

決勝射撃7本目で残り2人に絞られた。すかさず久保善宣監督から、仲尾、普段通りや」との声がかかった。そして8本目、リラックスして放つた矢は見事的中、直後に相手ははずし、優勝を果たした。

性エネルギーあふれる個性を持つ作品に与えられる「北日本新聞社賞」を受賞した。今回の作品名は、「Hep(hep)・アン・デュ、フラン(アン・デュ)の意。ひたすらダンスに情熱を傾ける二人の関係を表現した。

二人の出会い、ダンスを職業にできた久保田さんが社会人として入学。創作ダンス部を見学した際、今西さんのダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

第18回雅楽部海外公演 オーストラリア・マレーシア

今夏、雅楽部が実施した海外公演について、同部佐藤浩司顧問(人間学部教授)より報告を寄稿いただいた。紙面の都合上、抜粋を掲載。

雅楽部は、18回目となる海外公演を、去る7月10日から



モナッシュ大学オーデトリウムでの公演

旅行である。オーストラリア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

21日の12日間、オーストラリア、マレーシアを訪問して行った。一行は、学生24人に3人の卒業生の参加を得て総勢28人である。いつもながら楽器、装束、舞台道具など、約1トン近くの荷物をもつての

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

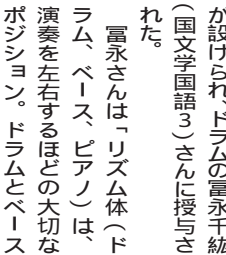
ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪

ア公演は雅楽部の9年前からの念願で、これまで、何度か計画を立てては、実行出来ずにいたが、今年は日豪友好年であるところから、その事業の一つとして認定され、さらに、国際交流基金の助成を得た。雅楽部訪



学生ジャズ界の「甲子園」として知られる「山野ビッグバンドジャズコンテスト」が8月19日・20日の2日間、東京都の「府中の森芸術劇場」で開催され、本学の軽音楽部(アルス)

山野ビッグバンドジャズコンテスト「審査員特別賞」受賞 アルスの富永千紘さん

ヤズオーケストラ)が出演。この演奏では、ドラム・ベースの演奏の素晴らしさが際立っており、急速「審査員特別賞」が授けられ、ドラムの富永千紘(富永千紘)さんに授けられた。

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

富永さんは「リズム体(ドラム、ベース、ピアノ)は、演奏を左右するほどの大切なポジション。ドラムとベース

「北日本新聞社賞」を受賞 創作ダンス

9月17・18日に富山県高岡市のUホールで行われた、少人数(5人以下)による創作ダンスコンクールで、本学の今西さん(体育3)、写真(右)と久保田さん(同1、写真左)がペアを組んだ「シエラ」チームが、創作ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

今西さんはクラシックバレエ、ダンスに深い共感を覚え、入部。今西さんも大会向けの創作活動の中で、久保田さんのダンスのフィードバックが自分の求めるものに非常に近いことを感じ取り、「シエラ」が誕生した。

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

のじぎく兵庫国体優勝 空手道形 稲垣宏実さん

10月3日、兵庫県豊岡市出石町出石中学体育館で行われたのじぎく兵庫国体空手道形。本学の稲垣宏実さん(中国語コース3)が見事優勝した。稲垣さんにとって、空手道は最も身近なもの。実家が道場を営み、物心かいない頃から空手の道着を着ていたという。そんな稲垣さんは、常に周りの期待を背負い、練習に励んできた。しかし、過去何度も挑戦した空手道形チームの選考では、あと一歩結果を残せなかった。稲垣さんは、形を技の正確さだけでなく、より実践的な武術として捉え、そこに相手

弦楽部演奏会 in 大塔町

弦楽部は9月18日に、五條市大塔町大塔保育園にて、五條市社会福祉協議会主催の子育て支援事業「ふれあいミュージック」に参加し、子ども連れの夫婦や老人方に楽しい弦楽アンサンブルの演奏を披露した。この「ふれあいミュージック」は今年で8年目。山間部で家族が点在する旧大塔村で、地域連携の子育て支援事業の一環として、本学卒業生の川嶋一暢さん(平成11年体育卒)の提案で始まった。弦楽部は事業開始当初から演奏を担当。親しみやすい音楽から本格的なクラシックまで様々な曲目を演奏してきた。今年には、サウンドオブミュージックメドレーなどの演奏の他、伝承の手遊びコーナーの輪にも参加。地元の子供や老人ともふれあった。五條市社会福祉協議会大塔支所長の福本政洋氏は、弦楽部の演奏はテレビなどで聴くとは異なった感動がある

関西学生選手権水泳大会

第80回関西学生選手権水泳大会が7月28日から30日にかけて大阪プールで行われ、最終日、男子800mリレーで伊藤達也(体育1)、山本裕貴(体育1)、木村大輔(体育4)、早島幹大(体育3)のチームが優勝。同種目での優勝は本学初。

第80回関西学生選手権水泳大会が7月28日から30日にかけて大阪プールで行われ、最終日、男子800mリレーで伊藤達也(体育1)、山本裕貴(体育1)、木村大輔(体育4)、早島幹大(体育3)のチームが優勝。同種目での優勝は本学初。